

十二、一切種智

仏智とは一切種智である。釈尊の求められたのもそれであったし、阿弥陀仏もまた一切種智そのものである。一切種智とは完全無欠なる如来の智慧である。

この仏智には必ず、一切群生とともにという大慈悲をとまなう。

大乘經典においては、いかなる菩薩も、必ずこの一切種智を求めて出発している。この智慧なくしては、成仏することができないがゆえである。しこうしてその成仏は必ず、一切群生を救わんがためである。すなわち大慈悲の成就のためである。

「我をして世に於て速かに正覚を成じ、諸の生死勤苦の本を抜かしめ給へ。」との法蔵菩薩の本願はそのまま一切諸仏菩薩の本誓である。

菩薩は一切種智を成就して自利成就しようとし、その自利成就はそのまま、一切衆生を濟度しようとする利他成就の大慈悲である。南無阿弥陀仏は、この自利利他一如の絶対的完全なる法身である。されば念仏の心は、この自利利他一如の根源に通ずる心である。これをはなれては、眞實はあり得ないのである。

釈尊が王城を捨て、恩愛を断ち、人間の享樂を棄てて出でられたのも、一切種智を成就せんがためであった。

さればその最初に訪れられた跋伽仙人の一群が説くところを聞かれても、満たされることなく出てゆかれた。かれらは禁欲苦行を続けていたが、それは、ただ単に、個人の幸福を求めて、苦行の因によつて、未来世、天上に樂しみを得んとするのにすぎなかった。しかるに釈尊の求めたもうものは、その個人の樂ではなかった。されば釈尊は、

「諸天の樂ありと雖も福尽くればすなはち窮りて六道に輪廻す。終に苦聚と為す。汝等云何ぞ諸の苦因を修しもつて苦報を求むるや。」

と告げて、ついに去つてゆかれた。個人的幸福を求める道は、ひつきょう、苦の因でしかないのである。重ねて言う。個人的幸福を求める道はやがての大苦惱の因でしかない。

釈尊の求めたまいしは、あくまで生老病死に沈没する一切衆生を、荷負し代表して、一切種智を求め、自利利他一如の解脱を求められたのである。

浄土教にあつては、一切種智とは、南無阿弥陀仏そのものである。衆生が一切種智を成就して、成仏するのではなくて、如来の一切種智に救われて成仏するのである。

されば一切衆生の貪瞋煩惱中に発起する大信心は、そのまま信心そのものの廻向であり、したがって信心は「信心の智慧」であり、念仏は「智慧の念仏」とよばれる。如来自利利他一如の大慈悲の廻向である。

大慈悲は如来にいたします。大慈悲は二つも三つもあるのではなくて、ただ一体ましますのみである。それが十方諸仏となろうと、無量の諸菩薩となろうとも、すべ

て法蔵の本願海にすぎない。大慈悲は、それが諸仏にあらうと、衆生にあらうと、ついに尽十方無碍光如来それ自身にたましますのであった。したがってこの大悲ましまさぬ所には仏道はあり得ない。

親鸞聖人は何を求めたまいしか。何ゆえに苦しみたまいしか。何を喜びたまいしか。何を捨てたまいしか。何を獲たまいしか。

四歳にして父に別れ、八歳にして母を失いたまいて、あわれご一家亡び、ご親屬に身をよせられた。しかるに藤原の栄華をすてたまいしこと、釈尊の転輪聖王の位を捨てたまいしにも似て、出家捨身の聖道門に向かい、時の流れにしたがつて叡山へと登られた。しかるに二十年の修学も、ただいたずらなる世間仮名の学問にすぎなかつた。

あわれ年とともに胸中に燃え上る一点の赤き炎、消さんとして消しえず満たされず、その胸中に動く魂よ、ささやく声よ。そはいったい何ものであるか。何を求めんとするのであるか。何を得よというのであるか。平家と源氏の争い、藤原の栄華享楽、叡山の名利権力、ついに日本には、若き聖人の赤き心を満たすものはないのか。一人の深き求道者を救うものなしとは、日本に日本を救う何ものもなかつたのだ。権力闘争、栄華風流、名利権勢、すべて五欲の相にほかならない。栄華の欲しき者は藤原にとどまるべし。権力の欲しき者よ。源氏に仕うべし。一世の尊敬の望ましき者よ、仏門に入つて大僧正たるべし。それらのいずれにもあらざるものを求むる心は、どこにゆくべきであるのか。

ああ。一切種智、ほんとうの仏道、無限の大慈悲、金剛不壊の信心、無上正真道、正定聚不退の位、これらはすべて、龍宮に入りたまひし空名にすぎないのであるか。

菩提心、生老病死を凝視してそこに動き出でる菩提心、そはただ一切種智によつてのみ満たされる心である。やがて、法然上人という人格の谷間より、名も吉水と、真如法性の清水、南無阿弥陀仏は、水源地をお浄土に求めて流れ出でておつたのだ。聖人はここに初めて満たされたもうことができたのであった。

無量無数阿僧祇劫の古に、善慧仙人は、この一切種智を求めて、道を修めた。時に国の太子普光は、城を捨て位をすてて出家し、正覚を成就して、普光如来となられた。この普光如来に会い、心からなる華を捧げた善慧仙人は、如来の前に五体投地して、心からなる合掌を捧げた時、自然に鬚髪は地に落ちて出家の相となつた。

意味深い話ではある。善慧菩薩は、普光如来より、阿僧祇劫の後、釈迦牟尼如来となるべき記別を与えられた。

劫初無始の始より、一切種智は流れており、一切種智を求むる心はあつた。これよりほかに群生の助かる道はない。真実もない。

今、印度の仏でなく、支那の如来でなく、日本の国土、大和民族のうちに君臨し、流れたもう如来は、法然上人の上に、親鸞聖人の上に顕現して、長く民族を無限に聖化し、救済し、自覚せしめたもうのである。

一切種智の生きたもう民族のなんと幸なることよ。

五欲の満足よりほか考えない民族、個人的幸福よりほか考えない人類、それよりほか教えない教育、個人の勝手を満たすことを約束する宗教、立身出世を出世の本懐だと教える常識的な親、すべて「しめて地獄」にすぎない。

祖師の教えを無視して、管長選挙に血眼になるもの、一身の安住栄華権勢を求める者すべて、不信不孝、大木につく白蟻であり、毛虫ではないか。

一切種智者、大慈悲者の前に、その不信、不忠、不孝に覚むべきである。久遠の真実の前にだれか聖伝教とともに、不信、不忠、不幸を泣かないでいられようか。

大聖たちが、爛漫たる桜花であるならば、われは、芝生の一葉にも足らぬいとも小さき存在ではある。しかるに、ひとたび久遠の本尊の前に合掌する時、久遠の古、善慧菩薩以来の無量の諸仏如来、恒沙の薩陲さつたの一切功德は、南無阿弥陀仏となつてわれの上に廻向成就したまい、やがて無限の未来を照らし輝きたもうてあるではないか。劫初より尽未来際にわたる、大慈悲の流れは、この現前の信一念に生きたもうてあるではないか。

ああ。一切種智者よ。億々恒沙の大聖よ、この信一念に生きたまい、念仏を護念証誠していたもうではないか。今朝、ただ、この至幸至福に、身のおき所なく静かにお念仏する。

「爰に愚禿積の親鸞、慶ばしぎ哉。西蕃月支の聖典、東夏日域の師釈に遇ひ難くして今遇ふことを得たり。聞き難くして已に聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して特に如来の恩徳の深きことを知んぬ。斯をもつて聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり矣。」

静かに念仏する時、見よ。わが胸中には、ただ、重く冷たき宿業の流れが、瞬時もやむことなく、動いているではないか。一波また一波、千波万波の泡沫は、あるいは急にあるいは緩に、そこになんらの実体あることなく、ただただ無限の暗をたたえて、過去の思い出に、未来の予想に、己一人の禍福のみにとらわれて、いまだかつて一度の懺悔あることなく、いたずらなる悔いと、動揺不安におびえつつ、十悪、五逆謗法、闡提の、たたけど、蹴れど、永久に覚むることなく、邪見虚仮のどす黒き五欲の流れがものすごく、あるいは泣き、あるいは笑わんとしているのみである。そこには、微塵の清浄真実あることなく、久遠劫来の罪惡生死のすべてを孕んで、無有出離之縁の無底の淵そのものである。

念仏はこの極悪自体に君臨し、この無明海を照破して、邪見の頂にはせ登らんとする念々の我執を食いしめて、大悲の内容としつつ、闇へ闇へと還来して、ついに大行のみが現実の大船であり、大行のみが絶対真実であり、真実在であり、生滅無常を超えての光輪にてましますことを信樂せしめたもうではないか。

念々に亡ぼんとするわれに、大悲無量のいのちを廻向して、この一切群生海を、おん身自らの内容として観じたまい、慚愧し、懺悔し、忍従し、聖化し、転悪成徳し、やがて感謝し、歡喜し、そこに正定聚不退の人格の王座となり、仏凡一体の融合をとげて、この極悪の一切を摂取して、一切の疑惑、不安を解消したもうてある。

「五濁惡時惡世界 濁惡邪見の衆生には

弥陀の名号あたへてぞ 恒沙の諸仏すすめたる。」

「願力不思議の信心は 大菩提心なりければ

天地にみてる惡鬼神 みなことごとくおそるなり。」

五欲煩惱は、己一人のために泣き、己一人のために笑い、如来大悲は一切衆生のために悲しみたまう。「大菩提心」は、五欲煩惱ならざる心である。ただちに如来の大悲心そのものであり、仏智そのものの具体的顯現である。されば大菩提心は、一切衆生とともに救われたい心である。自利利他一如の和魂そのものである。

「九十五種世をけがす 唯仏一道きよくます

菩提に不到してのみぞ 火宅の利益は自然なる。」

仏道の尊きは、五欲の利己的満足でなくて、大菩提の心なるがゆえであり、したがって唯仏一道のみ清浄と言ひ得る。九十五種の外道が世をけがすのは、外道がただ己の幸福のみを考えるがゆえである。この個我の幸福のみを願う外道を出でて大菩提心に生かされてのみ、火宅無常の世界におつても、仏智自然の本当の利益を得させ4ていただけるのである。菩提心はじつに、如来一切種智の大地における具体的な廻向顯現である。

日本の国土は尊い国土である。大乘相應の地であり、如来の大菩提心の流れたもう国土である。仏教が渡来してから、民族のうちに流れたもう法蔵の願心はその意識の世界に、生活のうちに顯われたもうたのである。その具体的な先驅が聖徳太子であり、つづいて、伝教、弘法、道元、法然、親鸞、日蓮等の諸大士が出現されて、大菩提心が民族の魂となった。国をほんとうに永遠ならしめるものは、高き道義よりほかにはあり得ない。最後の力、ほんとうの繁栄は、如来の一切種智、大悲心の流れたもうことよつてのみ恵まれる。

五欲の満足にことよせて、てつとり早く、流行してゆく宗教は民族のための毒素であり、亡国魂の養成にほかならない。五欲のみによつて築かれたものは必ず滅ぶ。

如来の大慈悲よ、一切種智よ、民族の魂に廻向顯現して、無限に聖化し、民族をして如来の眷属たらしめたまえかし。全世界の衆生とともに、浄土の大菩提心に生きて、浄仏国土の行願を実現せんかな。